



◇ナーサリーこぼれ話◇

「不敵な(?)おさんぽ」 7月27日木曜日くもり

ほしぐみ…0歳児と1歳児の低月齢児 3名
にじぐみ…1歳児の高月齢児と2歳児 7名

連日の灼熱の太陽も勢いを弱め、久しぶりに体がほっと一息つけるような気温の、7月下旬のある朝のこと。2歳児を見ている保育士Hさんと、朝の身支度が一緒になって、おしゃべりをする。「来る途中に、大々的に建築作業をしている工事現場があって、毎朝毎晩、様子が変わるんだけど、今朝は、道に面した巨大なシャッターが開いていたの。どうやら、工事車両が出入りをする日なんじゃないかと思うんだ。(子どもたちが)歩いて行くにはちょっと遠いかな……」とHさん。

なるほど子どもたちは、『はたらくるま』の絵本を好んで見ているし、ブロックで作ったりすることもある。重さも大きさも相当な実物がリアルに仕事をするとところを、子どもたちにぜひ見せたいという「担任ごころ」らしい。しかし……。

その工事現場は、2歳の足にはかなりの負担と思われる坂を下りきり、大きな通りの横断歩道を渡って、別の急坂を登りきった先にある。大人の足でも優に15分はかかる。比較的しのぎやすいとはいえ、夏の昼間にそこに向かうことが、果たして2歳児の夏場の活動として適するかどうか。

それでも、私(主任)は、判断を迷わなかった。「これは願ってもないチャンス！」と思う担任の勸を信じ、「見せたい、見たら絶対喜ぶはず！」という願いをくもことにした。

涼しいうちに行ってしまうかと、メンバーがそろったから早々に出かけることにした。その日、2歳児は男女児2名ずつの4名のみ登園。「大きなクレーン車、見に行くよ」と、4人にそっと声をかけ、散歩支度を促す。子ども4人と保育士Hさん、Oさんの6人でいざ出発！……と思いきや、お出かけを察知した1歳児のMが、われ先にと帽子をかぶり、必死で靴下を履こうとしている。支度を焦

りながらも、置いて行かれてなるものか！と、保育士をぐぐっと見据える様子には、気迫すら感じられる。こんな人のことを、一体誰が置いていけるというのか。歩き始めてわずか1ヶ月ほどのMは、果たして、私の押すベビーカーで、年長の子どもたちに堂々と同行することと相成る。

歩く道々、ベビーカーのすぐ前を歩く女兒が「うんうん、ちゃんと来てるね。一緒だね」と言うように私とMとをうれしそうに何度も振り返る。子どもたちは、本当によく歩いた。そして、ある子は、持ってきた『はたらくるま』の絵本と実物の工事車両とを見比べながら、ある子はクレーン車に夢中になりながら、またある子は、何度も何度も出入りするミキサー車の動きに魅了されながら、道端での見学時間を思い思いに過ごした。それから同じ道を、手をつないでゆらゆらと、あるいはベビーカーに揺られて、マンホールアートの目を奪われたり花壇の花やチョウに感謝したりしながら、ナーサリーに戻った。

その時の様子を撮った数少ない写真や堂々たる工事車両の切り抜き写真をフィルム加工して、担任が写真絵本を作った。Mはそれをその後、繰り返し繰り返し人に見せて、自分の名前を意味する「み、み！」と言ってベビーカーの写った写真を「ここにあたしがいるのよ！」と指さし、「Mちゃん、工場の所、行ったんだもんね」と言われては、そのたび鼻高々だったことは言うまでもない。

(主任保育士K)

